

「第3回 外国人児童生徒支援会議」が開催されました



国際学部特任准教授

若林 秀樹

栃木県内の日本語教室担当教員をメンバーとする、HANDS プロジェクト「外国人児童生徒支援会議」3回目が、2月6日日本学 UU プラザにて開催されました。学年末の校務多忙な時期にもかかわらず、小中学校現場から15名の担当教員の方々にご参加いただきました。

最初に、まもなく刊行予定のHANDS プロジェクト『教員必携 外国につながる子どもの教育3』の作成状況と内容を紹介しました。本書は大きく分けて、第1部「学校現場の“これまで”と“これから”」、第2部「外国人生徒の進路調査報告」、第3部「こんな教材使ってみよう」という構成になっています。講義形式で進められる第1部には、支援会議を通して収集した日本語教室担当者の悩みや、学級担任が困っていることなどの、貴重な声も収録されています。第2部は、前回の『教員必携〜』にも収録したものの続報です。第3部は、支援会議メンバーからの情報を基に、外国人児童生徒教育に関する教材の、特徴や使い方を紹介しています。

今回大きく時間を割いたのは、1月に文部科学省から発表された「外国人の子への日本語指導・26年度から教育課程化」についての話し合いでした。各拠点校や周辺地区の現状報告、今後の対応

策などについて意見交換が行われました。この情報については、「今まで知らなかった」というメンバーから、「情報を受けて既に校内でも話題にしている」というメンバーまで、周知度には差がありました。日本語指導にあたる人材や指導形態、そして評価や指導要録への記載についてなど気になる様々な項目は、今後の情報を注意深く収集しながら本会議での協議を進めること、そして、現時点で県内40拠点校の支援の実態をあらためて把握し、今後の基礎となるデータを作る、という2つの共通理解が図られました。

2年半前、初年度1回目の「外国人児童生徒支援会議」は、「外国人担当の教員、悩みを語り合う」と題され、テレビニュースや新聞で取り上げられてのスタートとなりました。現在は悩みを語り合う場ではなく、県内全体の支援体制向上のための実質的な協議を行う場に発展しました。また、支援の成果を刊行物に収録して、必要とされる人への発信作業もおこなえるようになりました。これまでの歩みにご協力いただいた、栃木県内40拠点校すべての担当教員の方々にあらためてお礼を申し上げます。そして、次年度からの「外国人児童生徒支援会議」が、更に発展できることを願っています。

「進め 日本語教室」

第4回

宇都宮市立清原中央小学校教諭

田崎 啓三

本校（児童数488人）のにはほんご教室には、14名の外国につながる子どもが通級しています。かれらの国籍は、かつて南米の児童が中心でしたが、この1、2年でアジア諸国からの児童も増え、多国籍化が進んでいます。専任教員である私のほか、日本語指導講師2名（ポルトガル・スペイン語、ウルドゥー語）と日本語ボランティア1名が来校し、

協力して指導にあたっています。

本教室通級児童のほとんどは在日期間も長く、日常会話には特に不自由がありません。そこでにはほんご教室では、各教科で使う更に難しい日本語を習得しながら、教科そのものの学習をどんどん進めています。それにより児童は教室での学習にも自信を深め、今ではどの子ども教室で伸び伸び活動すると